

高温に伴う農作物等の管理対策

令和7年8月27日
新潟県農林水産部

新潟地方気象台が8月25日に発表した高温に関する早期天候情報では、8月31日頃からかなりの高温になると予想されています（5日間平均気温平年差＋2.8℃以上）。また、8月21日に発表した1か月予報（8/23～9/22）では、向こう1か月の気温は高いと予想されています。

ついては、今後の気象情報に十分留意し、以下のとおり、高温に対応した管理対策の徹底をお願いします。

なお、農作業は気温の高い時間帯を避け、風通しの良い服装で、こまめな休憩や水分・塩分の補給を行って、熱中症を予防してください。

1 水稲

- （1）品質・収量確保のため、収穫時期や土壌の状態を考慮した上で、飽水管理は出穂期後25日まで、用水が確保されている地域は出穂期後30日まで継続する。
- （2）登熟期間が高温で推移していることから、出穂後の積算気温を目安にほ場ごとの籾黄化率を必ず確認し、黄化率が85～90%の適期に収穫する。
- （3）収穫期直前（出穂後積算気温900℃以降、籾水分が22%未満の時期）に空気が著しく乾燥した場合は胴割粒が多発するので、県の緊急情報や技術情報を参考にし、できる限り速やかに収穫を始める。
- （4）収穫時の籾水分が低い場合には胴割粒の発生を防ぐため、乾燥機に張り込み後は通風循環するなど、水分ムラを解消させてから加熱乾燥を行い、必ず手持ちの水分計で仕上げ水分を確認する。

2 大豆

高温が続くとカメムシ類の発生が多くなり、発生期間も長くなる。被害粒や青立ち株発生防止のため、前年度多発生した地域では発生状況に応じて追加防除を行う。

3 園芸作物共通

- （1）かん水施設のあるほ場では、土壌水分の確保と地温低下を図るため、夕方にかん水する。うね間かん水を行う際は、夕方かん水し翌朝にはなくなる程度とする。長時間滞水させると根腐れの原因となるので注意する。
- （2）高温乾燥が続くとハダニ類、アザミウマ類やオオタバコガ等のチョウ目害虫、うどんこ病の発生が多くなるので、状況に応じて防除を行う。
- （3）薬剤散布は、薬害を防止するため、日中の高温時は避け、朝夕の涼しい時間帯に行う。
- （4）施設園芸では、ハウス内温度の上昇を抑えるため、ハウスの屋根等に遮光・遮熱資材の展張等を継続するとともに、強制換気や施設側面のビニールの開放により通風を図る。なお、遮光することにより収量・品質が低下する場合があるため、天候に応じて、光量を調整する。

4 野菜

(1) 被覆資材による地温低下

地温上昇を抑制するため、生育中の果菜類等は厚めに敷きわらをするほか、今後、定植する場合は白黒ダブルマルチ等を使用する。

(2) 育苗・定植

ア 苗床温度の上昇を抑制するため、寒冷紗等の遮光資材を被覆するとともに、換気・通風に努める。特に接ぎ木の養生管理では、外張およびトンネルを遮光し温度低下に努める。

イ 苗の軟弱徒長を避けるため、かん水は早朝を基本とし、日中高温時にしおれる場合は葉水を行い葉面温度の低下を図る。また、晴天が続く場合は育苗後半の節水管理は軽く行う。

ウ 定植後の活着を図るため、定植作業は夕方に行う。定植する際、うね立て後の土壌の乾燥に注意し、土壌が乾いている場合は植え穴に十分かん水してから定植する。かん水が難しい場合は、土壌水分確保のため、定植直前に耕うん・うね立てを行う。

(3) 品目別の栽培管理

ア だいこん、にんじん等の直はでは、発芽を安定させるため、発芽までスプリンクラーなどで1日数回かん水し土壌表面の乾燥を防ぐ。

イ なす、ピーマン等の果菜類は、草勢低下を防ぐため早期収穫に努める。また、下葉や弱小枝を除去し、通風と採光を図る。

ウ トマト、ミニトマトは、着色不良を防ぐためハウス屋根等に遮光・遮熱資材の展開等を継続する。

エ ねぎは、生育停滞や軟腐病などの病害の発生原因となるので高温時の過度な土寄せはしない。

オ えだまめは、収穫前追肥で草勢を維持し、乾燥が続く場合はうね間かん水を行う。

カ さといもやアスパラガスは、かん水により生育停滞を防ぐ。

5 果樹

(1) 新梢管理

ア 通風・採光を良くし、防除効果を高めるために新梢管理を行う。ただし、強日射により果実や骨格枝背面に日焼けを起こさない程度に留める。

イ 日本なし「新高」は、高温・干ばつで果肉障害が発生しやすいので、果実への直射光を避けるため新梢管理は骨格枝基部に留めるなど必要最低限とする。

ウ ぶどうでは、急激な新梢管理により日焼け果が発生する場合があるので注意し、葉数が少ない部位の果房は笠かけ等により遮光する。

(2) 土壌水分、地表面管理

ア 多雨により土壌水分が過剰となった場合は、除草はせず下草による蒸散を促進させ根圏環境を改善させる。その後、土壌水分に合わせ、適宜除草する。

イ 干ばつが続き過乾燥となった場合は、根域までの給水が困難になるので、干ばつが予想される場合は、土壌が乾ききる前に早めにかん水を始める。

ウ 週間天気予報等を確認し、降雨の無い状態が続く場合は5～7日間隔で20～30mm程度のかん水を行う。

エ かん水用の水が十分確保できない場合は、効率的に深層への水分供給するため、樹幹下に溝や穴をあけかん水する。

オ 幼木は根量が少なく乾燥に弱いので、優先的に敷きわらやかん水をする。

カ いちじくでのうね間かん水は、葉のしおれや葉焼けの状態を観察しながら、1週間間隔を目安に行う。

(3) 収穫

- ア 干ばつ後の多雨など土壌環境が急激に変化した場合は、根が傷み果実の熟期が早まることがあるので、着色によらず果肉の状態を確認し遅れずに収穫する。
- イ 高温や乾燥が続くとナシやモモで水浸状果等の生理障害が発生しやすくなるので、庭先選果を徹底し出荷果実への混入に十分注意する。

(4) 病害虫

- ア 過熟等による落果実や未収穫果実を園内に放置すると病害虫の発生源となるので、園外で処分する。特にいちじくは、ショウジョウバエが多発し酵母腐敗病を媒介するので十分注意する。
- イ セイヨウナシ褐色斑点病は、日中が高温でも朝晩の寒暖差による朝露で感染するので、新梢管理や罹病組織の園外処分など、耕種的防除を含む総合防除を行う。

6 花き

(1) 球根類

- ア チューリップ等の球根類の貯蔵は、球根腐敗や球根を加害するダニ類の増殖を防止するため、通風に留意し、貯蔵庫内の温度をできるだけ下げる。また、過乾燥としないようにする。
- イ ユリの球根養成は、強日射による上位葉の日焼けとそれに起因する球根肥大の抑制を防止するため、定期的に地温の低い時間帯にかん水し、土壌の適湿を維持する。

(2) 切り花類、鉢物類

- ア 生育初期は、草丈やボリュームを確保するため十分にかん水する。出らい期以降は、上位節間の徒長を抑え品質向上を図るため、過剰なかん水は控える。
- イ ユリ切り花は、草丈確保や奇形花発生防止のため、定植前に芽伸ばし処理と順化处理を適切に行う。また、定植後の発根促進のため、定植前から遮光とかん水を行って地温低下と土壌水分を確保し、定植後は十分なかん水と敷わらを行う。
- ウ ヒートポンプ空調機が設置されている施設では、草丈伸長等による切り花品質を向上させ、生理障害による品質低下を防ぐため、冷房機能を利用し夜間冷房を行う。ただし、夜間冷房により収穫期の遅れや徒長により品質が低下する場合もあるので、十分検討の上利用する。
- エ ストック、キンギョソウなどの1・2年草切り花は、苗定植時の植え傷みを防止するため、定植前から遮光とかん水を行って地温低下と土壌水分を確保し、定植後は十分なかん水を行う。ただし、長期間の遮光は軟弱徒長や開花遅延の原因となるため、活着後は天候をみながら速やかに遮光資材を取り外す。
- オ 切り花の鮮度を保持するため、採花は朝夕の涼しい時間帯に行うとともに、採花後は速やかに清潔な水で水あげを行う。また、採花時との温度差による花しみ等の生理障害の発生を防止するため、切り花貯蔵時の温度管理に留意する。

7 家畜

(1) 畜舎の管理

- ア 建物からの熱伝導を抑えるため、屋根への石灰や遮熱塗料等の塗布、屋根散水、屋根裏や壁・床への断熱材の設置、窓への寒冷紗の設置等を行う。
- イ 畜舎内の通気を良くするため、開口部はできるだけ開放し、空気の流れを妨げるものは除去し、大型ファン・送風ダクト等で強制通風する。

(2) 家畜の飼養管理

- ア 家畜の体感温度を下げるには、飼育密度の低下、ファンによる送風、直接散水や散霧、毛刈りなどがあり、これらを組み合わせて行い効果を高める。
- イ 体調変化を早期発見するため、家畜の観察頻度を増やし、体調悪化の兆候が見られる場合は、速やかに獣医師の診療を受ける。

ウ 飼料摂取量を確保するため、良質で消化の良い飼料を給与し、ビタミンやミネラルを補給し、飼槽の残飼は速やかに清掃する。また、常に新鮮で冷たい水が飲めるよう、ウォーターカップや水槽はこまめに清掃し、水量や水圧を確認する。

(3) 牧草地の管理

高温が続くことで例年より作業時期が早まる可能性があるため、牧草等の生育状況を把握し作業準備を進め、適期に収穫する。

8 きのこと

(1) 生育管理対策

ア 하우스内の温度上昇による生育障害を防ぐため、遮光ネットや断熱材の設置により室温の上昇を抑え、ハウス内部や屋根等への散水により室温を低下させる。

イ 空調設備のない施設では、ハウス内の温度上昇を抑え、温度ムラをなくすため、ハウスの開閉による換気や送風機等で空気を循環させる。

ウ 乾燥防止及び表面温度の冷却のため、ほだ木、菌床等に適切な散水を行う。

エ 菌床の温度上昇を防ぐため、温度の高い栽培棚上段は使用しない。

(2) 害菌・害虫対策

ア 害菌・害虫の侵入を防ぐため、換気をする場合は、防虫ネット等で対策する。

イ 害菌の感染拡大を防ぐため、害菌の早期発見に努め、汚染された菌床は速やかに撤去する。

(3) 収穫時の対策

ア 高温下では、品質劣化が著しいため、適期に収穫する。

イ 品質劣化を防ぐため、収穫後は速やかに保冷库等で保管する。

9 漁業

養殖では、適切な水温・水質を維持し、養殖物の管理に十分注意する。

(1) 水温管理

日中の水温変化をこまめに観察し、必要に応じて冷却装置の導入や日陰を作り水温上昇を抑制する。

(2) 水質管理

定期的に水質検査を行い、水質の悪化が確認された場合は、速やかに換水や河川水を導入し水質を改善する。

水質悪化の原因となる残餌を減らすため、給餌量を調整し、残餌はこまめに除去する。

(3) 酸素管理

水温上昇や水質悪化により水中の酸素濃度が低下しやすいため、エアレーションや、大きな池（水槽）へ養殖物の移動や、放養密度を下げるなどし酸素不足を解消する。

農作業中の熱中症を予防しましょう!!

* 予防のポイント *

暑さを避ける

高温時の作業は極力避け、日陰や風通しのよい場所で作業



こまめな休憩と水分補給

喉の渇きを感じる前に、こまめに水分・塩分を補給



単独作業は避ける

複数名で作業を行う、時間を決めて連絡をとり合う



熱中症対策アイテムの活用

帽子や吸湿速乾性の衣服の着用、空調服や送風機の活用



出典：農林水産省「熱中症対策パンフレット」より